

松木静堂先生を偲ぶ

三 木 浄 達

松木先生は「静堂」という雅号を、お若い時から愛用せられていました。

たしか、甲州人だから武田信玄の「静かなること林の如く」という文からとられたかのように記憶しています。しかし、松木先生にとって「静堂」というのは、天性のお人柄を表現しているようにも思われて、なつかしい。

静堂先生は酒を好まれた。が、酒に呑まれたことを知らない。//飲んで呑まれぬ。これを仏者の不飲酒戒となす//というのが、静堂先生の酒に対する態度であった。

去る年の十二月七日、日布上人の三十七回忌で、法要、墓参をすませ、西谷の清水房に下って布上を偲ぶ宴があった。先生と久し振りに酒宴をともにしたわけであります。その時にも私に語られたことは、宗門の布教に関するご意見であった。

静堂先生は、宗門の布教に責任と熱情をもっていられました。

私が初めて先生の教えをうけたのは、四十余年の昔、大正十四年の春、祖山学院中等部一年に入学したときであります。教科としては、天台の教観綱要、倫貫綱要、四教儀集註さては三大部の玄義まで、極めて難しいものばかりであります。

難かしい天台学よりも、皮肉な笑いをもらしながら、語られた暗示的な説教を、よく覚えています。

「杜多とは頭陀とも書く、坊主の一番大事な修行である。杜多に十二通りの修行があるが、要は乞食ということである。坊主は乞食の親玉のようなものだ」

と、先生は「杜多」という号をも使用されていました。ひそかに頂いて、私はずっと使い自らを誡めています。

その頃、先生の道服が羊羹色に日やけしていたのが印象的で今も尊く偲ばれます。

静堂先生は、名前にテンタンで、お上手口が利けず、わが信ずる道を行くというタイプでありました。よく島智良さんの話をされたのは、感化をうけた恩師だったからでしょう。ある時の皮肉話に

「政治屋になるな、そんな時間があつたら、自分の寺の草でも抜いた方がよい」ともいわれました。

宗門の鼻にかゝった政治家が、お気に召さなかつたのです。でも、決して直接、人の名をあげて批判したり、諍うようなことはされませんでした。

身延に生れ、身延に育ち、身延に生涯を捧げられた静堂先生は「身延の日蓮上人」を、こよなく愛し、よく書き、よく話された。

先生には、身延と日蓮上人が、そのまゝ根本宗学だったのです。

「宗学は教室に立て籠り、観念の遊戯に耽る宗学であつてはならない」とは、先生の教育信念でありました。

あたかも昭和六年は、宗祖日蓮上人の六百五十遠忌で、静堂先生が弁論部長として金学生の指揮を執り、三門に映

画を、街頭に演舌を、清正公堂、日朝堂、三光堂には高座説教をと、金山に展開した布教活動は壯観だった。こんなに身延学園の出身ならば、演舌でも説教でも出来ないものはない、といわれるほどになったのは、静堂先生のおかげであります。

でも、静堂先生は、世間でいわれるような雄弁の人ではなかった。むしろ諄諄と説く講義型の雄弁でありました。随ってゼスチュアールが少い、その上お声が低い、よほど耳を傾けていないと聞きとり難いときさへありました。

それでいて、先生のお話はいゝ、聴衆をして深い感銘を与えずにはおかないというのはどうしてか、それは先生の「静かなること林の如く」静かに考えさせるものがあるからでありました。これこそ静堂先生の「静かなる雄弁」と申上げたいと思っております。

この静かなる先生の雄弁は、（棲神十五号に）

「仏教徒の使命は、經典を自己に反省し、時代に生かすことである。換言すればすべての經典の文字の中に、自己の血を通はすことが、我等の態度でなければならぬ」といふ、仏教徒の使命觀から発しているように思われます。

私は昭和十一年の春、立正大学を修了して身延にかえり、「身延山布教師兼臨時詰」の辞令を頂いてから、三十余年、静堂先生に教えられたこの道一筋に生きてまいりました。

去年の大学新校舍落慶の日、一階の北側の教室で、法衣を洋服に着替えられる先生のお姿を、四十余年の時空を越えて見まもっていました。ボンと膝の上の法衣の包みを叩いて

「三木君、布教のことを頼む、伊藤さんが亡くなったんだから、誰にも遠慮することはないよ、宗学の素養のない

人が布教師になっても困るよ」と、

静かに、ポツンと話されたのが、数ならぬ教え子、私への最後の教えになりました。

昭和四十三年六月七日 記

(京都・教法院住職)

松木先生を偲ぶ

灘 上 恵 教

松木先生がとう／＼亡くなられた。先には松木先生を「兄さん」と呼んでいた小松浄祐師が逝ってしまった。かゝる世とは知りながらも本当に寂しい。惜しい。ビルマの戦地で身延の夢を見るとキマツタように出てきて会ったのは両師である。人の世の不思議な縁とでもいうべきか。私が十九才で出家して身延に登り祖山学院に入った時、松木先生は天台宗大学の留学を卒えて学院の教鞭をとっていられた。その颯爽たる四十数年前のお姿が今もなつかしく臉に浮ぶ。当時の学院の雰囲気として先生と学生の間は一家の如きもので隔りなく、私もついで／＼学生らしからぬ我儘もした。しらず／＼後年の先生と私との間柄が出来上って行った。

先生のお人柄は、私には「淡々」という一語が一番よくあてはまるように思う。天台学をやられたためでもなからうが、何んだか天台風というか、禅的なような感じがする。誰にも知らさずあっさり遷化せられたが之も淡々と生き